

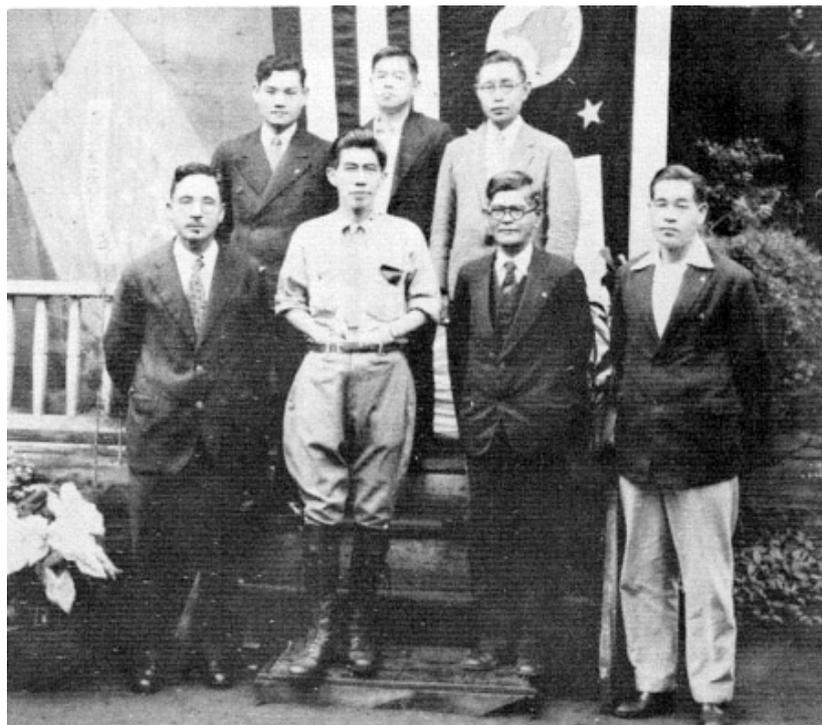
## 第八章 モジアナ地方の先駆日本移民が係わった その他の植民地・移住地

### 1 トレス・バラス移住地

北パラナのトレス・バラス移住地は1932年（昭和7年）からブラジル拓植組合（ブラ拓）が売りだした。1万8千340アルケーレスの土地である。この植民地の中心市街地がアサイ（ASSAI）であり1945年この地に郡制がしかれアサイ市になる。

1941年末に於ける分譲総面積1万4,800アルケーレス、全移住地在住者1,614家族その全人口8,666人、この移住地の最初の支配人はモジアナ線クラビーニョス駅近郊、ブラジル人農場で監督をしていた斎藤幸（みゆき、長野県小県郡西塩田村出身、渡伯1918年4月若狭丸）が1932年4月に就任、その年の11月まで、2代目は第1回移民でこの地方の草分けの1人臼井介仁に変わる。第3代目は平野運平の実弟の榛葉彦平氏が1939年10月から翌年向こう5ヶ年植民者の自治もまかせられるため自治支配人になる。

（「移民の生活の歴史」450～451ページ）



前列左から畑中仙次郎、加藤妙之、臼井介仁、後列右から古関徳弥、榛葉彦平各氏、1939年  
「トレス・バラス移住地50年史」より転載

### 2 ロンドリーナ市の国際植民地

1930年からの契約であったが、同土地会社の日本人部主任となって日本移民へ土地売りの宣伝したのは、グアタバラ耕地出身の第2回高知移民の氏原彦馬である。1932年4月ロンドリーナ方面の日本移民家族は46家族。その年カンバラ駅より鉄道はピラ・ジャタイ駅まで開通し、ロンドリーナ町まではそれより

85 キロある。ロンロリーナまで鉄道は間もなく開通、55 万アルケーレスの土地会社の本部事務所はロンロリーナ（英国シンジケート）にありここは国際植民地とも呼ばれた。入植者はブラジル人、ドイツ人、イタリア人、日本人、他合計 33 ヶ国（1950 年調査）日本移民農地購入面積は全植民地の 7,9%であった。（「移民の生活の歴史」464 ページ）

### 3 サンタ・ローザ植民地

1936 年に南リオ・グランデに海興が創ったサンタ・ローザ植民地の支配人は富岡（第 4 回移民神奈川丸山梨県出身）でありバロン富岡で通す。バロンとは祖父富岡敬明に拠っている。肥前小城藩の出身で明治維新に江藤新平、島義男等と活躍、山梨県権参事、熊本県令を歴任し、1891 年貴族院入りを果たしたのち甲府に隠居する。この富岡男爵の孫（啓明の四男に復起“またき”の次男）というので“バロン”の称号が冠せられる。皇紀 2600 年（西暦 1940 年）9 月慶祝使節団の一行に加わり帰国、1953 年 66 歳で死亡。

1941 年に夫を追って帰国したシズ未亡人は 4 年後に再渡伯、以来サン・パウロ市に住む。富岡 漸・シズ夫妻もグアタパラ耕地配耕された。（「消えた移住地を求めて」241 ページ）

### 4 バストス移住地

1928 年 6 月 18 日（海外組合連合会“12 組合の連合によって土地購入”移住地名な 6 人の地主の 1 人エンリケ・バストスの名をとったものである。

初代事務所主任にグアタパラ耕地より転出者であり平野植民地開拓者の 1 人畑中仙次郎が赴任した。バストス移住地に関しては記録が充分あるので、畑中仙次郎氏に関して後述する。

### 5 山形青年耕地

1922 年（大正 11 年）海興の移民部長坂元靖の呼び寄せで安部弥門渡伯、パナマ丸山形県山形市大字志戸田、サランジェ駅（現ジュルセ）のダスー・セラス耕地（リベロン・プレート始発～フランカ終点駅）に 1 年就労、終了後 1923 年にエスピリト・サント州都ヴィトリアから北上バイヤ州方面 20 キロ（セラという小さな町）に名付けて山形青年耕地？に阿部弥門、小松操（柏倉門田）入植、翌年 24 年に＊中川勇蔵、（山形市前明石村）この折山形中の後輩遠藤佐治兵衛（南館）も加わる。

初年度旱魃で大失敗、坂元氏の説得で安部はサランジェへ資金くりのため帰耕、前後に山形中で遠藤と同級で東京植民地に入っていた田瀬久衛（沼木）が呼び込まれて加わる。そのほか菊地弥四郎（東根）、金沢真琴（沼木）、また校長が中川と同じ人物だったという縁で新潟県人の山崎貞次も参加するが、陽の目を見ずして消えるものであった。

＊（上述中川勇蔵氏は現在グアタパラ移住地と縁のある、ポツカツ農大教授中川ジュリオ氏の爺父）  
（小笠原公衛著：消えた移住地を求めて）

## 畑中仙次郎氏について

平野運平氏と共にグアタパラ耕地とは深く関わり合いのある畑中氏。

1912年4月巖島丸第3回移民45家族（熊本、広島、岡山県人家族）を引率した畑中仙次郎は兵庫県多紀郡、東京外語学校スペイン語科卒業、夫妻で入耕。翌年忠雄氏誕生。

1914年5月着伯の帝国丸第10回渡伯移民32家族（広島県人等）を率いてモジアナ線オーランジャ駅ペローバ耕地に通訳兼監督として3年半をおくる。平野植民地初期開拓者中に同氏の人柄を記述している。

1917年に平野植民地日本人会創立初代会長平野運平、副山下永一、学務委員として畑中仙次郎が名をつらねる。創立以来学務委員、会長を務めるものであった。

（「平野25周年史」）

平野運平氏の信頼に答え日本人による“日本人植民地、平野植民地建設同志として参加”、ノロエステ線の原始林に挑み、悪戦苦闘を体験、先駆的拓人の辛酸を舐める純然たる一農民と自ら鋤をふるい、コーヒー樹4万本を仕立て、70アルケーレスの土地を所有して、開墾にあたること12年。

1927年サン・パウロ総領事館移民課に席をおくこと6ヶ月、たまたま海外移住組合連合会の進出にタイアップし、1927年より連合会の事業に着手して購入土地の調査のため、7ヶ月間、全サン・パウロ州及びパラナ州を物色し、1928年バストス移住地開拓の任務を帯びてこれに着手する。以来移住地支配人として1943年に至る。

1940年皇紀2600年祭典に海外代表として外務省招聘にて訪日。

1960年7月日本政府より勲5等瑞宝章伝達される。

1947年より2年間バストス産業組合に務む。

コチア産業組合バストス倉庫主任として5年間就任す。

1965年12月30日77歳にてバストスで永眠。

1928年～1947年の19年間に及ぶ、移住地支配人としての記録、文献が殆んど見当たらないが、氏は常に移住者の為に有利な産業を取り入れべく研究、努力をされていた事は衆知の事実である。開拓当時、バストスに畑中耕地の名称で約100アルケーレスの土地を所有していたが、これも直ぐに入植者に分譲し、其の後こうした私財を築いた形跡は全く見あたらない。当時氏の立場からすれば、正当な手段で、幾らでも私財を増やすことが出来たと思うが、精廉潔白は氏の性格がそうしたことを好まず、移住地の発展に生涯をかけたその精神が、今もってバストス住民が氏を尊敬する所為であろうと思う。

また1955年に水野昌之が発行された“バストス25年史”の序文に書かれた畑中仙次郎氏の言葉をここに書き添えます。（資料提供バストス市阿部五郎氏2004年9月）

## 序に代えて（原文のまま）

海外移住組合連合会が1927年8月1日に創立され、同年4月10日下旬故梅谷光貞氏が専務理事として渡来、移住地の建設に就いて調査研究、超えて1928年8月6日移住地の選定に着手、6月18日バストス移住地購入の手続きを完了、爾来同日を以って移住地創立記念日と定められ、このとき私は移住地経営主任を拝命致しました。翌年4月有限責任ブラジル拓植組合が設立、同6月18日、第1回入植者を日本から迎えてより今日に至るまで幾多の波瀾曲折を経て速くも25周年を迎えたのであります。これを記念するためにブラタク本部に於いて各移住地の歴史の編纂を計画され、囑託水野昌之氏を現地に特派して、その収集に当たらしめられたに際し、開拓当初より開拓者の1人として、我が移住地の足跡を詳細に後世に残し置くことは私共の大きな義務と存じ、百方手を尽くしたがいかにも、厄介に逢い、性格な記録を由もなく、僅かに逸散せるものを集め、各自の記憶に辿って誠に纏まりのないものを提供した次第でありました。その後、ブラタクの方針が変更、中止せらるるの止むなきに立ち至ったので、折角仕上げたものを闇に葬ることは誠に遺憾なりとし、水野氏は独力編纂を思い立ち、バストス連合日本人会後援の下に一般在住者にその協力を求め、全在住者、またその学を偉いとし、満腔の賛意を表して、茲に愈々バストス移住地25周年史成る明報に接し、衷心喜びに堪えません。

既に10周年を迎えた当時は殆んど満植で、生産も順風満帆、我が世の春を謳歌した時代からすでにブラタク首脳部に於いては、愛土精神の喇叭にガット運動の提唱に、これ努められ植民者また思いを秋原に附したも拘わらず、表土流失が如何に恐るべきであるかと未だ身以って味わった経験の無きままに遂に不覚にも今日の地力衰退を招来して略奪農業は亡国の前触れであることを痛感したのであります。

然るに吾等には祖国の後援の下に特殊なる生い立ちをして来た我が移住地を無為に亡ぼしては相成らぬということと、奥地邦人最大の植民地を形成した以上、立派な農村に仕上げて聖州砂質壤土地帯の砂漠化を見事に克服して日本農民の真価を発揮せねばならぬと云う2つの大きな責任を感じるのであります。幸いにして残留3百数十家族植民者25年の浮き沈み因っているところを探求して、不屈不業、今後更に一步を進めてこの行詰まりを打開するよう、日夜肝胆を砕いております。もとよりこれは容易ならぬ仕事ではあるが、結局、永年作物の造成と共に大小家畜を取り入れ、その肥料や堆肥を土へ還元して永久に地力を活かし、高度に機械農耕を併用して合理的に運営すれば、必ずその目的は達成せられると云う確信の下に着々と歩を進めているのであります。今やようやくその前途に曙光を認めるまでに相成りましたので、近い将来に於いて奥パウリスタの一角に、更に完備せる植民地飛躍、純然たる楽土が出現すものと信じて疑いません。回顧致しますれば、我が移住地建設に際し、その育成に献身せられた重役の方々や寝食を共にし、苦楽を分って来たが、今は地方に転居の同僚諸君に対する追懐の情綿々として尽きるところを知らず、また幾多同志先亡の面影を偲ぶ時、転た感慨無量のものがありますが、余生今日に逢うた私は、幾多先駆者の霊に守られ、敬愛する植民者諸氏に援けられて、初期四世紀半を一画として今後なお我が移住地永遠の繁栄に微力を致し、ここに生を受けた数多い吾等の子弟が、何時までも心の故郷として慕い寄る立派な郷土を築き上げることができますれば、私が生涯の望みこれより大なるものは無いと存じる次第であります。

1955年3月15日 畑中仙次郎

（注記）グアタパラ移住地入植当年（1962年）8月13日バストスより畑中氏一行7人に慰問激励される。その折グアタパラ耕地内での犠牲者を知らされる。その後養鶏、養蚕を通し親密の関係が続く。

\* (1962年8月グアタパラ通信No.70 近藤安雄報告より転載)

畑中仙次郎一行7人来耕(1962年8月13日)。バストス移住地から、その創設者、畑中仙次郎氏(74歳兵庫県人)等7人が入植者の慰問激励に訪れたが、畑中氏から往時のグアタパラについて次のような想い出話があった。

私は1912年5月4日グアタパラに入って丸2年、通訳兼監督をやらされた。その時には随分鍛えられたが、何物かを会得し、以来在伯50年となるが、その2年がどれ程役に立ったか知れない。

日系移民は1908年6月18日サントス着の笠戸丸で800名が渡航してきたが、その内鹿児島18、高知2、新潟3の計23戸。88名が同月28日にグアタパラ耕地に入った。笠戸丸の引率者は静岡の人・平野運平氏であった。外語スペイン語卒業の5人男といわれる人を1ヶ月前から待機させていたが、私もその1人であった。その同船者を6班に分け、6つの耕地に配属したが、他の5つの耕地には問題が多く、ズモンと云う耕地などは紛争の調停が出来ず、220人が1人残らず引き揚げた位であった。グアタパラだけは紛争がなかった。これは耕地の支配人もよかったが主として平野運平氏の力であった。

第2回目(実際は第3回目)の移民として明治45年(1912年)5月に巖島丸で渡航した人の内45家族を引率してグアタパラに入った。同年また神奈川丸で100家族がはいったのでその年には145家族がはいった。最盛期には、ここに450家族位の日系コロノが居た。当時コーヒーコロノは想像外に酷かった。奴隷解放後22、3年でまだ封建性が強く、コロノの人権は認められず、農場主は殿様で、よしんば悪事を働いた者が逃げ込んで来ても耕主が庇えば官憲は手が出ず、耕地内は別天地で耕主の発行するグアタパラ特有の金が通用していた。そして当時引き抜きの幣があったので、耕主はコロノの出入を厳重に制限して自由を束縛していた。

日本移民は大体5~6月に船が着き、カフェーの収穫から始めた。当時のグアタパラはカフェーが主で良く茂って立派であり、200万本と云っていた。30本~100本1区画として400区以上あり、年30万俵のカフェーが出来た。施設は理想的に完備されて他にその比を見ず、自然の地形を完全に利用し水を塞ぎ止めて、カフェーの実を流水で流し、乾燥場に流し込んで水を落とし、カフェーだけ集め、トロで倉庫に入れて精選し、隅の穴から落とすと貨車に入るように成っていた。

コロノは軍隊式にすべてラッパを合図に移動し、45家族10班に分け、監督がついて午前4時頃ラッパで起床し、弁当や水を用意し梯子をもち、乳幼児を背負って、夜明けには作業場に着くように行ったが、遠い所は6キロ位あった。昼は畑で食べ、夜に入って帰るので、重労働であり、男たちは覚悟して来たが、女の人や娘たちには非常な苦勞であった。上塚さんの句に“夕ざれや樹かげに泣いて珈琲もぎ”と云うのがあったがその通りであった。報酬は日当2ミル50で若い人はよくホームシックにかかった。コーヒーの採集は5月~11月まで続く。しかし日系コロノはよく働き、競争心も強いので耕主もそれを認めて、50~100本を区域に抽選で割り当てて、請負式でやらせるようになった。そうすると皆一生懸命に競争し、1~2歳の子供をカフェーの樹に縛りつけて仕事を続け、泣いてもみてやらず、子供は泣き疲れて眠ってしまうようなことが続いた。後に8万HA位の農場主となった、松原移民の松原安太郎氏夫人も、長男の時は縛りつけたといっておられた。私の引率した第3回移民者がガムシャラに働いて、それから日系人は良く働くといわれるようになったが、大半は夫人の賜であった。女の方は夜家に帰っても夕食の仕度があり、日曜には洗濯仕事があって、休む暇がなかった。それで体の弱い人は倒れていった。

娯楽とてなく、相撲や将棋位のもので、娘さん達には楽しみなく、当時どうしていたかよく分からない。今本部のあるモンブカ付近は当時何もなく、沼と灌木があっただけ、雨で沼が一杯になり乾季になると小さい池が方々に出来て魚が池に残った。モンブカ川は魚が多い川で、今は魚が食べられるが、当時生魚は考えられず、魚といえば鰯の塩つけかボラ位のもので、皆モンブカの池に来て網で魚を取って食べるようになり良く取りに来たが、大きいのが良く取れた。しかしマラリア蚊が多かったので魚を取りに行って一週間か10日すると発熱して寝込んでしまうので、農場は忙しいし支障が多いので、耕主はモンブカに行くことを厳禁した。それでも移住者はコッソリ行っては病気に罹り、寝っていると大目玉を食ったものである。

高知出身の細木と云う人が米作を始めた。場所は低地と丘地の間であったと思う、それに続いて若い人が3、4人、2～3年間米作をやったが洪水にやられた。

グアタバラ耕地には通算して800～1,000人位入ったと思う。従って死亡者も多く墓地には300人位人が眠っていよう。11月2日がお盆なので、これら無縁仏に新しい移住者が参ってあげれば何よりの功德になるだろう。

当時の新移民はよく家庭争議を起した。女の人が辛いため、不平を起して寝てしまう。男は昼間耕地で働く辛棒に耐えたが、家に帰ってから家庭の紛争には随分悩まされたものである。木村という熊本出身の人など、始めは甥や姪が多くてよかったが、そこの22～3歳になる娘さんなどは夜逃げをして駅に行き、鉄道線路を歩いて300キロの道を、サン・パウロまで行った人もあったが、原因は家庭のゴタゴタであった。青年中にも逃げ出す者があった。他の耕地では一家全員夜逃げすることがはやったこともあった。



グアタバラ耕地のシンボル「グアタバラ」